特別支援教育の扉 №３４　　令和５年１月２０日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「お年玉なし問題にチャレンジ」解答編

34号で紹介した問題の解答と解説です。（あくまでも精神科医の本田秀夫先生の考えです）

（１）学校とは「社会に出ていくための土台をつくる」場所である

登校すること、勉強することも重要であるが、それが学校卒業後の人生につながっていくものでなければ意味がない。目標は卒業後の人生にあり、登校や勉強は、そのためのプロセスにすぎない。学校の標準が狭いこと、大人たちが学校をきっちり作りすぎてしまったことが、一部の子どもたちを苦しめている。何もかもを標準的にこなせなくても、社会に出てやっていけることを、いろいろな例を交えて子どもに伝えてほしい。**学校は子どもたちが、「社会の中でよりよく生きていく力」を身に付けるためにある。**

（２）学力とは「自発的に学ぶ力」である

子どもの能力を「成績」という切り口で評価することが当たり前になっているため、大人は学力を伸ばして、よい人生を歩んでいけるようにと願い、将来役に立ちそうなことを教えたがる。人は教えられたことよりも、自分で学びたくて学んだことをよく習得する。子どもが学ぶときというのは、「次ももう少しやってみよう」という意欲をもって取り組んでいるときである。子どもに何かを教えるときには、そういう意欲を引き出すことが大切である。**学習は自発的な行為であり、やらされていることは、いずれやらなくなる。**

（３）教育で大事なのは、子どもの「モチベーション」を伸ばすことである

いろいろなことを学んでいくためには、「できる」に基づくモチベーションをもつことが重要である。子どもの目標をやや低めに設定し、「できない」よりも「できる」に注目して、その子の得意なことや好きなことを通じて、集団の中で何らかの役割を果たす。そのやり方がその子の社会参加のスタイルとして定着し、自信とモチベーションをもちながら、集団活動を経験していける。**子どもはモチベーションをもてるとどんどん学習していく。**

（４）発達障害の子は「小学校入学」から、特別支援教育を利用する

子どもに一度失敗させてから環境を調整すると自己肯定感を損なうこと、年度の途中から特別な場の調整は簡単ではないことから、早く「保険」をかけておけば、いつ困りごとが生じてもすぐに対応できる。専門家の間では、何十年も前から「早くから支援を受けてきた子どものほうが、社会に出たときの適応がよい」と言われている。**子どもに合う環境を居場所としながら、多様な学びの場（通常の学級、通級指導教室、特別支援学級）を自由に行き来できるようにする。**

（５）共生社会とは「相性最悪」な人たちがお互いにリスペクトする社会

「みんなで一緒」という目標を立てると、その集団に「標準」が生まれ、そこから外れることをよしとしない風潮ができる。視力が弱い人も、発達の特性がある人も困っているという点では同じである。ただ多数派か少数派なのかが違うだけである。少数派の人は、困り感を理解してもらえなくて、更に困っている。**少数派の論理を認識するための意識改革と、「みんなで一緒」ではなく「お互いをリスペクト」する姿勢が必要である。**

子どもが学校を卒業して社会へ出るときに重要なのは、成績や学歴ではなく、モチベーションだと考えています。学ぶことにモチベーションをもっている子は、卒業後も意欲的に活動していけます。みなさんには、子どもが学校生活を通じてモチベーションをもち続けられるように、サポートをしてほしいと思います。（精神科医師：本田　秀夫）

発達障害の子どもには、「広いストライクゾーン」と「低めの目標」を設定しながら、学習環境を調整することが大切です。子どもの表情は、環境によってどんどん変化します。